

世の中は引き続きコロナの天下。その上、蒸し暑さも重なって出にくい日々ですが、七名が元気に輪読に挑みました。今回のハイライトは、新田勢が籠った越前・金ヶ崎城の落城場面。糧食尽きて餓鬼となった武士たちに交じり、後醍醐皇子の尊良親王までが自害する凄惨なシーンです。指名予習者、辻一郎さんが太平記の矛盾を突く疑問を出されて、盛り上がりました。9月の旅行は比叡山日帰りの予定となりました。

◇この日の輪読箇所は次の通りです。

(一) 先帝吉野潜幸の事

一天両帝、南北京 (P219～222)

足利尊氏との偽装和睦で、京都に帰った後醍醐天皇は、幽閉されていた花山院を夜陰にまぎれて脱出し、奈良の内山永久寺経由、賀名生に入る。しかし、手狭で辺鄙なので、蔵王堂のある吉野山と掛け合い、満山の衆徒に迎え入れられて御所と定めた。ここに二人の天皇が南北に都する「南北朝」時代となった。

(四) 義治旗を揚ぐる事、杣山軍の事

(五) 越前府軍の事

杣山勢の蜂起 (P227～233)

いったん足利方に加担した杣山城主、瓜生保は思い直して弟たちがいる杣山城に帰還、預かっていた脇屋義助の子、義治を大将として反足利の旗を揚げた。足利方は高師泰が杣山攻めに向かったが、杣山勢の夜襲に敗走。勝ちに乗った杣山勢は足利方の主将、斯波高経の本拠、新善光寺城を攻め落とした。

(六) 金ヶ崎城後攻めの事 (七) 瓜生老母の事

瓜生兄弟討死 (P235～238)

杣山城の瓜生保らは金ヶ崎城支援のため出陣するが、足利方今川頼貞軍の待ち伏せ攻撃に遭遇、瓜生保は弟の義鑑房とともに討死し、援軍は成らなかった。

(九) 金ヶ崎城落つる事

落城で集団自決 (P244～253)

待てど来ない援軍。兵糧も尽きてくる。状況打開の

ため、新田義貞、脇屋義助、洞院実世の陣中首脳が援軍再建に杣山城に向く。しかし、その工作がはかどらぬ中に、飢餓が城中の戦闘力を奪った行った。この状況を見届けた足利方は総攻撃をかける。「これまで」と悟った留守将の新田義頭(義貞嫡子)は後醍醐皇子尊良親王と自害。他の将兵も次々に後を追った。東宮の恒良親王は近くの浜に脱出したが、足利方に逮捕された。太平記によると、籠城した830人のうち、降参者12人、脱出者4人以外は全員自害して戦場の土と果てたという。

(一〇) 東宮還御の事 (一一) 義頭の首を梟る事

恒良親王の機智 (254～256、287～288)

足利方は金ヶ崎戦で収集した死者の首に新田義貞、脇屋義助が見当たらないため、逮捕した恒良親王にただした。親王は、二人が杣山に向かったことを隠し、「自害した二人の首を家来が火葬した」と答えた。一方、尊良親王の首は、都大路を渡し獄門に懸けた。

※恒良への讓位? 太平記は、後醍醐天皇が越前に

下る恒良親王に皇位と三種の神器を授けたという。しかし、北畠親房の神皇正統記は「北国に行啓あり」とし、天皇としての行動とはしていない。このため、恒良への讓位を疑問視する学者も多いが、恒良が敦賀から奥州の結城宗弘に発した論旨が残っている。そこで後醍醐は、どころんでも自らの皇統が生き延びれるよう意図的に皇位を二重化した、と見る学者もいる。吉野脱出でその必要は雲散霧消した。

(一二) 比叡山開闢の事 (P288～300)

太平記の散歩道4 「中世神話の世界」に概要

第20巻輪読予定ページ (10月19日)

- 1) 347 新田左～347 攻めさせらる
349 越後国～351 思へり
- 2) 351 越後勢～353 急がれける
360 山門の～361 懸けたりける
- 3) 364 さる程に～367 行ひける
- 4) 374 閏7月～379 臥したりける
- 5) 381 軍散じて～384 帰り給ふ
- 6) 384 義貞朝臣～385 あはれなれ
388 左中將～392 おはしける
- 7) 392 吉野殿～396 御事なり
- 8) 396 中にも～399 居たりける
- 9) 399 夜半過ぐる～403 流しける